歴史散歩

れきしさんぽ No.32

坂本繁二郎生家 （久留米市指定有形文化財　建造物）

久留米が生んだ近代洋画の巨匠、坂本繁二郎の生家は、久留米に唯一残る武家屋敷で、京町にあり、市の指定文化財です。

久留米市では、平成22年春の公開を目指し、現在整備事業を行っています。建物は、調査や記録をもとに、繁二郎が生活していた明治35年（1902）頃の復原を予定していますが、市民の皆様の利活用も考慮した施設に生まれかわります。

復原予想図（平成22年3月竣工予定）

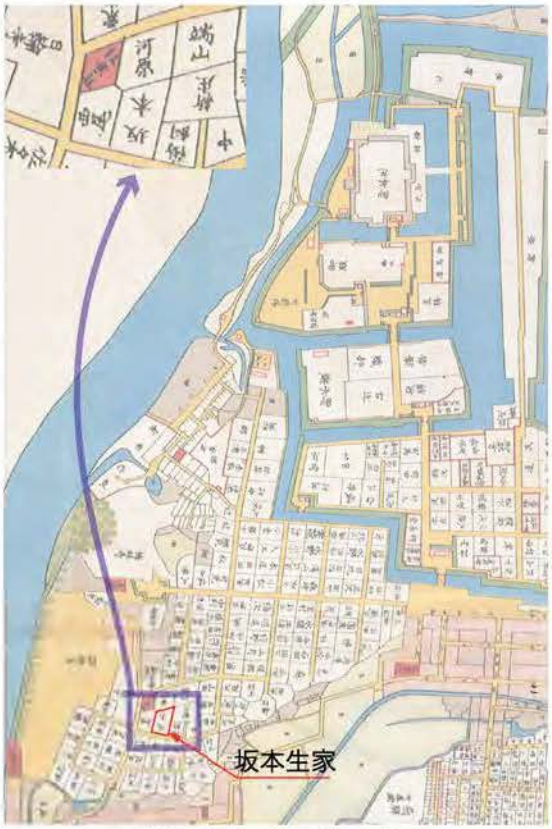
坂本繁二郎生家（明治42年）

坂本繁二郎は、27歳の時に東京で生活するため、生家を手放します。

この写真は裏書に自宅との決別記念であることが記されています。

坂本繁二郎

近代洋画の巨匠、坂本繁二郎は、明治15年（1882）、旧久留米藩士の子として京町に生まれました。高等小学校時代、青木繁（註1）と席を並べ、ともに森三美（もりみよし）の画塾に通い洋画の道へ進みます。以来、青木とは生涯を通じて友人であり、良きライバルとなります。　坂本は20歳のときに上京、その後画壇での地位を固め、二科会の創設に参加。39歳でフランスに渡り、帰国後は終生久留米、八女に住み、美術界に大きな功績を残しました。「帽子を持てる女」、「放牧三馬」など数多くの作品を制作。74歳で文化勲章を受章し、昭和44年（1969）に87歳で亡くなりました。



天保年間久留米城下絵図

坂本家の歴史

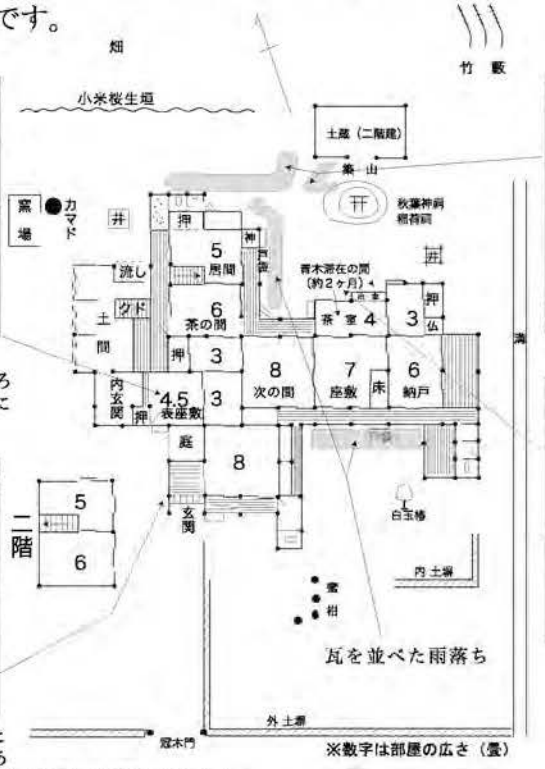
坂本家は摂津国（現大阪府）の出身です。田中吉政の家臣になった一族は重職につき、慶長６年（1601）に筑後一国の大名となった吉政とともに三河国（現愛知県）岡崎から筑後に下りました。その後、繁二郎の先祖は元和６年（1620）に田中家が断絶すると浪人しますが、新たに久留米藩主となった有馬家に正保２年（1645）、半兵衛義政が150石の知行をもつ御馬廻組として召し抱えられました。半兵衛義政から数えると繁二郎は9代目にあたります。

生家の位置

坂本家の屋敷地は侍小路である京隈小路にあります。この小路は元和９年（1623）に出来たもので、坂本家の屋敷地は京隈小路（きょうのくまこうじ）の南端にあたります。坂本生家から南に広がる屋敷地は小松原小路（こまつばらこうじ）と呼ばれ、延宝５年（1677）に建設されたもので、坂本家の屋敷地は表口18間、奥入25間、敷地面積は約450坪です。

玄関の床下で見つかった胞衣壺（えなつぼ）
（出産時、胎盤などを人通りの多いところに埋めて、子供の丈夫な成長を願う風習により埋められた壺）

玄関で見つかった瓦を並べた雨落ちと中庭の玉石（当初の玄関は西向きであったことがわかりました。）



瓦を立て並べた通路

青木繁が起居していた茶室の礎石の抜き跡

▲坂本生家見取図　解体時の発掘調査成果を加えたもの

生家の概要

明治43年（1910）に繁二郎は結婚し、母とともに東京へ転居のため、同じ小路の侍であった山田家が生家を購入します。以来、平成14年（2002）に久留米市に寄贈されるまで、建物は山田家によって維持管理されてきました。坂本繁二郎生家は久留米城下町に唯一残る武家屋敷で、平成15年（2003）7月28日に久留米市指定文化財（建造物）となりました。

生家は木造で、藁葺建物と瓦葺建物が結合した一部２階建です。明治末年頃の図面によると、当初あった「玄関、土間、茶室」などが無くなっていましたが、「居間、茶の間、台所」などがある居住空間と「座敷、次の間」などの接客空間に分かれ、武家屋敷の特徴的な構造をよく残していました。茶室には、3ヶ月ほど青木繁が居候したというエピソードもあり、繁二郎や青木が描いたといわれる襖絵もあります。

発見された棟札（赤外線写真）

生家の保存整備事業

久留米市は平成22年の公開をめざし、平成18年度より生家の保存整備事業を始めました。いったん解体調査をした建物は、繁二郎が20歳で上京する明治35年（1902）頃の復原を予定しています。延床面積は243.4㎡（74坪）です。

解体調査では、次のようなことが分かりました。建築年代は三時期に分かれ、「座敷・次の間」、「表座敷」、「台所」の順序で建てられたこと。台所からは明治7年（1874）の棟札が発見され、残る部分は江戸後期（1800年代）のものであること。また、壁の中から、慶応4年（1868）の戊辰戦争の記述がみられる古文書等、坂本家と幕末の久留米藩を物語る貴重な史料

解体前の坂本繁二郎生家

解体工事現場公開

屋根裏

部材調査

壁の状況

節分（繁二郎が描いたとされる襖絵）

放牧三馬（石橋財団　石橋美術館蔵）

が発見されました。

続く発掘調査では、青木繁が居候したといわれながら、後に解体されて規模が分からなかった茶室の礎石跡が確認され、玄関も西向きであることが判明しました。また、建物周辺に瓦を立て並べた園路や雨落ちが発見されました。さらに、玄関の床下から、胞衣壷（子どもの出産時にその健やかな成長を願い、胎盤などを入れたものを人通りの多いところに埋めておく風習で、ここでは杯を２枚合わせたもの）が見つかりました。

現在は、復原工事に入っていますが、古い部材を極力使い、伝統的な工法で建物を建てています。礎石（そせき）据え付け、軸組み、屋根の茅葺き、土壁施工等、文化財建造物の復原過程を現場公開、記録保存をしながら進めています。また、公開後の利活用を考慮した諸設備を設けます。

一方、市民団体「坂本繁二郎生家保存会」等とともに、後世へ生家を伝えていくための事業も検討しています。今後は、平成22年の一般公開に向け、見学にとどまらず、生家を活用した事業など、市民の皆様との協働も欠かせないものとなるでしょう。

（註1）青木繁：明治15年（1822）荘島町生まれ。17歳で上京、洋画塾不同舎に入門し、翌年東京美術学校に入学。重要文化財「海の幸」「わだつみのいろこの宮」などの作品を残し、明治44年（1911）、28歳で死去。

アクセスマップ

問い合わせ先

久留米市文化観光部
文化財保護課
TEL. 0942(30)9225
FAX. 0942(30)9718
坂本繁二郎生家保存会
久留米市大石町143
（京町校区公民館内）
TEL. FAX. 0942(35)0171

発行機関：久留米市文化観光部 文化財保護課　久留米市城南町15番地3　TEL.0942(30)9225　FAX.0942(30)9718
発 行 日：平成21年　月　日